

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 鳥取県教育委員会
 所 在 地 鳥取県鳥取市東町一丁目271番地
 代 表 者 職 氏 名 山本 仁志

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	とっとりけんりつやずこうとうがっこう	ふりがな	おぐら けんいち
学校名	鳥取県立八頭高等学校	校長名	小倉 健一
ふりがな	わかさちょうりつわかさがくえんちゅうがっこう	ふりがな	もりた じろう
学校名	若桜町立若桜学園中学校	校長名	森田 二郎
ふりがな	わかさちょうりつわかさがくえんしょうがっこう	ふりがな	もりた じろう
学校名	若桜町立若桜学園小学校	校長名	森田 二郎

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

小学校英語教育の教科化と中学校・高等学校の内容の高度化に伴い、4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を系統的に育成していく観点から、教育課程、指導方法、評価方法等の改善について研究開発する。

(2) 研究の概要

小学校から中学校への接続において、文字の学習に困難さを感じる生徒が出てくるという課題に対して、小学校段階から英語を読むことや書くことに慣れ親しませることによって中学校の学習にスムーズに入っていけるように、文字指導のあり方や、教科化に対応した評価方法等について研究する。

中学校では、文構造や語彙の習得を重視した指導になりがちとの課題に対して、生徒が互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動が中心の授業となるよう研究する。そのために、CAN-DO リストの形での学習到達目標を活用し、内容に踏み込んだ言語活動や技能別の評価方法等について研究する。

高等学校では、授業中、教員と生徒の間では、英語での平易な応答はできているが、生徒同士

のコミュニケーション活動は活発ではないという課題に対して、文構造、語彙などの知識獲得・定着の面も含めて、教育課程を系統的に整備し、より高度な言語活動が行えるように目標や内容について研究する。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

小学校では、外国語活動の時間を楽しみにしており、相手意識を持って活動に取り組むことができる反面、言い方が分からないとか発音が難しいという理由で話す活動には自信がないと答える児童がある。また、中学校入学後、音声を文字化していく段階になると学習に困難さを感じるようになることもある。そこで一つ一つの英語の発音を丁寧に指導することや、慣れ親しみの活動を工夫することを通して自信を持たせ、小学校段階から文字指導を行うことによって中学校の英語学習にスムーズにつないでいきたい。そこで、今年度から6年生において文字と音の指導を帯活動として取り入れ、フォニックスに重点を置いた指導を行う。フォニックスを学ぶことで、単語を読むことができる力の育成を目指すとともに、字体を整え書くことにも取り組んでいく。教材としては、文字と絵を合わせた自作教材を使って、フォニックスの定着を図っていく。また、教科化に伴い、小・中・高等学校を通じた一貫したCAN-DOリストの形での学習到達目標を設定し、評価方法についても研究を行う。

中学校では、文構造や語彙の習得を重視した指導になりがちとの課題に対して、生徒が互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動が中心の授業となるよう改善を図りたい。そのために、CAN-DOリストの形での学習到達目標を活用し、身の回りの出来事や話題について基礎的な表現を使って意見のやりとりをする、与えられたテーマについて5文以上の英語で賛成か反対かの意見を書く、物語の朗読やある程度の長さを持ったインタビューやスピーチを聞いて内容を理解する、興味のある話題に関する文章のあらすじや起承転結の展開を理解するなどの4つの領域の内容に踏み込んだ言語活動や技能別の評価方法等について研究を行う。

高等学校では、CAN-DOリスト形式の学習到達目標を設定しながら、4技能を統合したコミュニケーション活動を実践している。しかし、授業における英語使用について、教員と生徒の間では使用教材の内容に関する平易な応答はできているが、生徒同士の英語によるコミュニケーション活動は必ずしもうまくいっていない。その理由としては、コミュニケーション活動への自信の裏付け（成功体験）の少なさが考えられる。そこで、生徒同士のコミュニケーション活動が中心となる授業への改善を行い、小学校、中学校での成功体験を高校での成功体験に円滑に接続させたいが、それには活動経験だけでなく、文構造、語彙などの知識獲得・定着の面での連携も必要である。この2つの面での接続・連携を円滑に、効果的に行うことを目的に研究を行う。

②研究仮説

- ・小学校から高等学校まで見通して、CAN-DOリスト形式での学習到達目標を年間指導計画の中に適切に位置づけ、指導と評価の改善を図ることによって、子供達に4技能バランスのとれた英語によるコミュニケーション能力を身に付けさせる。
- ・「英語の授業は英語で行うことを基本とする」観点から、教師が授業における英語の使用割合を増やす、言語活動の割合を増やす、スピーキングテストやライティングテストなどパフ

パフォーマンステストの回数を増やすことによって、子供達の英語によるコミュニケーション能力を伸長する。

- ・小・中・高等学校の CAN-DO リスト形式での学習到達目標に系統性を持たせたり、児童・生徒の考えや気持ちを伝え合う言語活動が中心となる授業が行われたりするように、それぞれの校種の教員が協同して研究にあたる。
- ・高等学校ではコミュニケーション英語Ⅰ及びⅡにおいて環境問題や時事問題に関する説明文を扱う際、教科書に掲載されている挿絵や画像並びに教科書本文のキーワード・キーフレーズなどを用いながらパートの概要を英語で発表し（リテリング）、それに1～2の質問並びにコメントを付加した英語プレゼンテーションを行う。質問は発表生徒が興味・関心を持った内容に関して発表生徒自身が調べ、聞き手に有益と思われる情報を基に作成する。その結果として、発表者からの質問を基にした1～2ターン程度の生徒間英語コミュニケーションが成立する言語活動の実現を目指す。発表を聞く生徒並びに指導者は所定のコメントシートに評価結果を記入し、発表生徒に還元する。コメントシートの内容は「評価」「内容」「声量・明瞭さ」「アイコンタクト」「態度・表情・ジェスチャー」「コメント（良い点・改善点）」とする。またその発表の様子をビデオに収録し、生徒が視覚的に改善点を理解できるように配慮をする。

③研究成果の評価方法

【児童・生徒】

- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査
- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況
- ・授業中の言語活動の割合
- ・英語力調査（外部試験）

【教員】

- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の設定（小・中・高で系統立てる）
- ・「話すこと」「書くこと」に関するパフォーマンステストの回数
- ・授業中の英語の使用割合
- ・英語力調査（外部試験）

(4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
① 学校 外国語活動型	第3・4・5・6学年 1コマ	第3・4学年 1コマ	第3・4学年 1コマ	第3・4学年 1コマ
② 学校 教科型	第 学年 0コマ	第5・6学年 1コマ	第5・6学年 2コマ	第5・6学年 3コマ

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

第一年次

[小学校]

- ・ 3・4年生における外国語活動の実施（外国語活動教材 “Hi, friends!”）
- ・ 3・4年生における外国語活動の授業研究会（指導助言者を招聘し、広く公開する）
- ・ 5・6年生における外国語活動の実施（外国語活動教材 “Hi, friends!”）
- ・ 5・6年生における教科型週1コマの年間指導計画、単元ごとの CAN-DO リスト形式による学習到達目標の作成（外国語活動教材 “Hi, friends!” を使用して「読むこと」「書くこと」の学習活動も構想する）
- ・ ALT による教員の英語コミュニケーション能力向上講座
- ・ 先進校視察

[中学校]

- ・ 単元ごとの CAN-DO リスト形式による学習到達目標の作成、小学校の学習到達目標との整合を図る。（検定教科書）
- ・ 音と綴りを関連づけた系統的な指導の計画
- ・ 中高連携授業研究会（「読むこと」をテーマとし、指導助言者を招聘し、広く公開する）
- ・ ALT による教員の英語コミュニケーション能力向上講座
- ・ 先進校視察

[高等学校]

- ・ 単元ごとの CAN-DO リスト形式による学習到達目標の評価方法の作成（検定教科書）
- ・ 中高連携授業研究会（「読むこと」をテーマとし、指導助言者を招聘し、広く公開する）
- ・ 先進校視察

第二年次

[小学校]

- ・ 3・4年生における外国語活動の実施（外国語活動教材 “Hi, friends!”、独自教材）
- ・ 5・6年生における週1コマの教科型英語教育の実施（文部科学省作成予定の補助教材）
- ・ 5・6年生における適切な評価方法の研究
- ・ 5・6年生における教科型週2コマの年間指導計画、単元ごとの CAN-DO リスト形式による学習到達目標の作成
- ・ 授業研究会（強化地域拠点の中・高等学校と連携し、指導助言者を招聘し、広く公開する）

[中学校]

- ・ CAN-DO リスト形式による学習到達目標の達成状況の把握（検定教科書）
- ・ 授業研究会（強化地域拠点の小・高等学校と連携し、指導助言者を招聘し、広く公開する）

〔高等学校〕

- ・ CAN-DO リスト形式による学習到達目標の達成状況の把握（検定教科書）
- ・ 授業研究会（強化地域拠点の小・中学校と連携し、指導助言者を招聘し、広く公開する）

第三年次

〔小学校〕

- ・ 3・4年生における外国語活動の実施（外国語活動教材 “Hi, friends!”）
- ・ 5・6年生における週3コマの教科型の時間割、指導体制等の研究
- ・ 5・6年生における週3コマの年間指導計画、CAN-DO リスト形式での学習到達目標、単元ごとの評価規準、評価方法の作成（文部科学省作成予定補助教材）
- ・ 授業研究会（強化地域拠点の中・高等学校と連携し、指導助言者を招聘し、広く公開する）

〔中学校〕

- ・ CAN-DO リスト形式による学習到達目標のより高度化への見直し（検定教科書）
- ・ 授業研究会（強化地域拠点の小・高等学校と連携し、指導助言者を招聘し、広く公開する）

〔高等学校〕

- ・ CAN-DO リスト形式による学習到達目標のより高度化への見直し（検定教科書等）
- ・ 授業研究会（強化地域拠点の小・中学校と連携し、指導助言者を招聘し、広く公開する）

第四年次

〔小学校〕

- ・ 3・4年生における外国語活動の実施（外国語活動教材 “Hi, friends!”）
- ・ 5・6年生における週3コマの教科型英語の実施（文部科学省作成予定補助教材）
- ・ 研究会、発表会を通して全県への成果発表

〔中学校〕

- ・ 「授業は英語で行うことを基本とする」授業の実施（検定教科書）
- ・ 授業研究会（強化地域拠点の小・高等学校と連携し、指導助言者を招聘し、広く公開する）

〔高等学校〕

- ・ 発表、討論、交渉等の高度な言語活動を行う英語授業の実施（検定教科書等、独自教材）
- ・ 授業研究会（強化地域拠点の小・中学校と連携し、指導助言者を招聘し、広く公開する）

○平成27年度の進捗状況・課題

〔小学校〕

アルファベットの学習については、3年生から英語学習を始める利点を生かして、3、4年から多感覚を活用して文字に触れる時間を多くし、5、6年時における「フォニックス」と「読むこと、書くこと」への導入をスムーズに行えるよう計画を立てた。今後3学期に実施し、成果と課題について検証していく予定である。

また、外国語活動教材“Hi, friends!”の中で、多くの単語や表現を扱う単元については、表現項目を分けて複数学年での学習とすることで、単語や表現の学習をスパイラルに取り入れ、中学校の学習にもつながるよう意図した。児童へのアンケートでも授業で扱った題材の内容についてもっと知りたいという回答も見られ、扱う単語や表現の負担を減らすことによってコミュニケーションの内容への興味関心が高まることを期待したい。

来年度は、5、6年で週2コマの授業を実施することとしている。年間指導計画については、2月の校内研修で他教科との関連を視野に入れた計画を策定することとしているが、作成にあたり、3、4年での既習表現や教科横断的な視点をどのように取り入れるか等を、担任と連携して検討していく必要がある。なお、2コマ目については、週時程の中に入れることとし、調整を進めている。

5、6年生の評価については、評価基準を設定したテストを活動の中に取り入れ、児童の英語への関心意欲を高めるために文章による肯定的評価を実施した。今後も継続して、パフォーマンステストなどの形態によるテストを工夫していきたい。

[中学校]

CAN-DO リスト形式による学習到達目標を単元の指導に反映した例として、3年生 Unit 5 “Electronic Dictionaries — For or Against”（東京書籍 New Horizon English Course 3）では、単元の評価基準を「電子辞書についての賛否や理由、感想等についてまとまりのある5文以上の英語で話すことができる。」と設定した。そこで、本文で電子辞書と紙辞書のメリット、デメリットを読み取った後、書く活動で自分の賛否を電子辞書と紙辞書のどちらかに決めて、その理由や感想などの考えをまとめた。それを基にして、ALT に口頭で自分の意見を発表し、質問を受けるスピーキングテストを実施した。さらに、単元のまとめとして、電子辞書派と紙辞書派に分かれて、ピンポンディベートに取り組んだ。この成果として、教科書の読解から自分の考えを書く・話す活動につなげ、さらに互いの考えをピンポンディベートという形でクラスの中で共有することができた。また、ステップを踏んで行ったので、生徒の負担感が少なく、かつ、活動を変えながら繰り返し同じテーマで英語を使用しても意欲が継続し、最後のディベートでは意見を言い合い盛り上がることもできた。課題としては、このような取組を、複数の単元で取り入れることにより、スパイラルな学習活動とし、生徒が英語力の向上を実感できるようにすることである。

中高の連携に関しては、2学期末から2年生と3年生で、高校が取り組んでいるリテリングを中学校でも実践した。実践例として、2年生 Let's Read 2 “Try to Be the Only One.”（東京書籍 New Horizon English Course 2）の学習において、1ページの内容を読み取った後、音読練習で名詞を隠した音読（パターン 1）、動詞と形容詞を隠した音読（パターン 2）、いろいろな語を隠した音読（パターン 3）の3種類の音読を練習し、その後、教科書本文に関するピクチャーカードと新出語句リストを参考にしながらリテリングを行った。3種類の音読をしている間に、英文への習熟が高まり、リテリングへの橋渡しとなった。また、暗唱と異なり、文章が前後しても本文の内容が伝えられるという活動のため、暗唱ができない生徒でも思いついた英文を言うことで達成感を得ることができた。暗唱が、内容よりも語句や文法を正確に再生して伝えるという知識・理解の活動であるのに対して、リテリングは、英文が前後したり、別の単語に言い換えたりしても良く、語句や文法の正確さよりもいかに内

容を伝えるかが重要視されるため、暗唱よりも言語を運用して話す力を伸ばすことになり、中高で連携して取り組んでいけば、実用的な英語活用能力の育成に役立つと感じた。

〔高等学校〕

研究対象学年としている第1学年の授業で、「発表、討論、交渉等の高度な言語活動」を4技能統合型のコミュニケーション活動として進める際、それを下支えするものとしてリテリング活動を授業の中心に据えている。その理由は、言語習得の過程においてインプットからインテイクに至りアウトプットに発展する中で、リテリング活動が生徒の英語運用能力向上に効果的だと判断したためである。より効果的なリテリング活動を研究するため、今年度は2回にわたって指導助言者を招聘し、リテリングに取り組む意義と手法について演習を交えて指導助言をしていただいた。

2回の授業研究会を通じて見えてきた課題は、リテリング活動を発表、討論、交渉等の高度な言語活動へステップアップさせるためには、リテリングの運用方法の改善が必要ということであった。現状では教科書本文の内容を相手に伝える際に、本文表現をそのまま用いることをさせたり、こちらが指定したキーワードを使わせたりしていたが、自分でキーワードを選ばせる手法や、また、討論につなげるために相反するキーワードを、生徒AとBに分けてそれぞれに与えていくという手法を取り入れることも有効だと分かった。

現在はリテリングしたものに理由も含めた自分の意見1～2文を付け足し（I think… because…の形式で）、そこから聞き手の生徒が英文で問い返すという1ターンから2ターンの相互コミュニケーション活動に発展させている。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

第一年次

〔小学校〕

- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（3～6年生、9月）
- ・ALTによる教員の英語コミュニケーション能力向上講座参加者数（12月）

〔中学校〕

- ・音と綴りを関連づけた指導の検証
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（1～3年生、9月）
- ・「話すこと」「書くこと」に関するパフォーマンステストの回数（1～3年生、12月）
- ・授業中の英語の使用割合（1～3年生、12月）
- ・教員の英語力調査（12月）
- ・外部試験の活用による生徒の学力の検証

〔高等学校〕

- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（1～3年生、12月）

- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（1～3年生、9月）
- ・「話すこと」「書くこと」に関するパフォーマンステストの回数（1～3年生、12月）
- ・授業中の英語の使用割合（1～3年生、12月）
- ・教員の英語力調査（12月）

第二年次

[小学校]

- ・音と綴りを関連づけた指導の検証
- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（5・6年生、11月）
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（3～6年生、9月）
- ・教員の英語力調査（12月）

[中学校]

- ・学力調査（1～3年生、4月）
- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（1～3年生、11月）
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（1～3年生、9月）
- ・「話すこと」「書くこと」に関するパフォーマンステストの回数（1～3年生、12月）
- ・授業中の英語の使用割合（1～3年生、12月）
- ・教員の英語力調査（12月）

[高等学校]

- ・学力調査（1年生、9月）
- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（1～3年生、11月）
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（1～3年生、9月）
- ・「話すこと」「書くこと」に関するパフォーマンステストの回数（1～3年生、12月）
- ・授業中の英語の使用割合（1～3年生、12月）
- ・教員の英語力調査（12月）

第三年次

[小学校]

- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（5・6年生、11月）
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（3～6年生、9月）
- ・教員の英語力調査（12月）

[中学校]

- ・学力調査（1～3年生、4月）
- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（1～3年生、11月）
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（1～3年生、9月）
- ・「話すこと」「書くこと」に関するパフォーマンステストの回数（1～3年生、12月）
- ・授業中の英語の使用割合（1～3年生、12月）

- ・教員の英語力調査（12月）

[高等学校]

- ・学力調査（1年生、9月）
- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（1～3年生、11月）
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（1～3年生、9月）
- ・「話すこと」「書くこと」に関するパフォーマンステストの回数（1～3年生、12月）
- ・授業中の英語の使用割合（1～3年生、12月）
- ・教員の英語力調査（12月）

第四年次

[小学校]

- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（5・6年生、11月）
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（3～6年生、9月）
- ・教員の英語力調査（12月）

[中学校]

- ・学力調査（1～3年生、4月）
- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（1～3年生、11月）
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（1～3年生、9月）
- ・「話すこと」「書くこと」に関するパフォーマンステストの回数（1～3年生、12月）
- ・授業中の英語の使用割合（1～3年生、12月）
- ・教員の英語力調査（12月）

[高等学校]

- ・学力調査（1年生、9月）
- ・CAN-DO リスト形式での単元目標の達成状況（1～3年生、11月）
- ・英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査（1～3年生、9月）
- ・「話すこと」「書くこと」に関するパフォーマンステストの回数（1～3年生、12月）
- ・授業中の英語の使用割合（1～3年生、12月）
- ・教員の英語力調査（12月）

○平成27年度の進捗状況・課題

[小学校]

音と綴りを関連づけた指導については、6年生において、フォニックス認識の学習と補助教材のワークシートを使った書く活動を、毎時間の初めの15分を使って行った。年間を通して学習を行っているが、フォニックスに関心を持って、意欲的に継続して取り組む姿が見られている。今後は3～4文字程度の簡単な単語を、フォニックスを使って読むことにも取り組み、中学校の英語学習へつなげていきたい。課題として、週1コマの学習の中で各時間のはじめの15分間を文字の学習に使うことで、その後の“Hi, friends!”を使った学習の時

間にしわ寄せがきてしまった面があり、1コマでは時間が不十分であると感じた。また、小中連携の観点から音と綴りを関連づけた指導内容の共通理解を図り、中学校の英語学習へつなげていく必要がある。

アルファベットについては、発音されるアルファベットを聞いてその文字を選ぶペーパーテストや教師との1対1のインタビュー形式によるテスト、グループでの活動を観察しながら評価するテストを行った。基準としては、相手が言うことを理解して、適切に応答している姿を「A」とし、各テストにおいて約8割の児童が達成することができた。評価を行うことで、単元の最後の姿をイメージし単元構成をしていき、児童ともゴールを共有しながら学習に取り組むことができた。テストの内容を含め、評価場面の設定の工夫が、今後必要となってくると思われる。

英語学習へのアンケート調査については、5年生において、1回目のアンケートでは7割の児童が英語を話す活動に自信があまりないと回答していた。その後の学習の中でインタビュー活動やロールプレイなどの言語活動を、必然性を持ったものにし、スモールステップで取り組んでいったことで達成感を得ることができた児童が増え、2回目のアンケートでは「自信がある」、「どちらかといえばある」と回答した児童が7割となった。一方、4年生では“Hi, friends!”の後半になるにつれて表現が長くなったり、難しい言い方が出てきたりしたことで、英語を話すのが難しいと感じている児童が出てきている。学齢を考慮した学習内容の検討も必要である。英語学習への関心・意欲に関するアンケートについては、小中の接続を意識した内容を次年度からは質問項目に取り入れ、小中連携の取組に生かしていくことも必要である。

[中学校]

学力調査に関しては、3年生にGTECを2回実施した。1回目は、生徒にとって初めての形式のテストであり、CDにしたがって問題を解き後戻りすることができないことや、実践的な問題形式で図表やパンフレットのような資料から読み取ること、英作文で書く文章量が多いことなどに戸惑いが見られた。しかし、2回目には、問題形式や進行方法にも慣れ、英作文を書く量も増えていた。資格取得型の試験では合否が出るため、苦手な生徒には落ちたくないという抵抗感があるが、GTECは得点方式であるため、結果を受け入れやすいようである。このような実用的なテストを受けることにより、真の英語力は入試の得点ではなく、実用的な英語活用能力であることを生徒に意識づけることができる。その一方で、教科書は未だに文法中心のものであり、実際のパンフレットを読み取るようなものではないため、教師が実用的な英語の習得を目指して授業を組み立てることが難しく、教材研究の負担感が大きくなるどころが課題である。

英語学習への関心・意欲に関するアンケート調査を6月と12月の2回実施した結果、2年生の2回目の調査で、英語力が向上したと思う理由に、「4月に比べ、先生の話す英語が聞き取れるようになったと思うから」、「格段によくしゃべれるようになったと思うから」などの回答があった。その一方で、「英語の勉強は好きですか」という質問に対して、「もう少し日本語を使って分かりやすく教えてもらったらうれしい」、「先生の指導方法や進み具合で不満に思うことがある」、「日本語に“訳す”のがないので、文章をなかなか理解しにくい」などの回答があり、英語で授業を進めることや言語活動を多用することに不安を感じたり、

意義が十分理解されていなかったりする生徒がいる実態が分かった。そこで、次年度以降、より高度な言語活動に取り組むには、CAN-DO リストを生徒と共有し、生徒自身も目標や評価の在り方を理解して、意欲を高めていく必要がある。

パフォーマンステストの実施に関して、英語表現と理解の能力について、英検二次試験方式のリーディングテストを行った。初見の英文を音読し、その音読を5段階評価し、その英文に関する質問とカードに載っている絵に関する質問に答える試験である。1学期末と2学期末の2回行ったが、その結果、2年生の平均で音読が3.6から4.3に、Q&Aが3.1から3.8にそれぞれ0.7ポイント上昇した。音読では、未習の語句を、フォニックスを利用しながら読むことができたり、Q&Aでは、即興的に質問を理解し、答えられたりするようになってきている。しかし、例えば3年生の絵に関する問題では、Where is telephone? の問いに対して、It's on the wall.の wall が言えないため答えられない生徒が多くあり、既習事項と未習事項の兼ね合いを考えることの大切さが課題となった。

3年生では、2回目のアンケートで「どちらかといえば英語の勉強は好き」と回答した生徒の数が減り、「英語の勉強は好き」と「あまり好きではない」が増えた。英語の使用を多くし、言語活動を中心とした授業に対して、好きと嫌いが分かれたようである。そこで、英文の直読直解に不安を感じている生徒に対して、2年生、3年生とも英文とその対訳の日本語（英語の語順で表記したもの）を載せたプリントを配ることにしている。

「書くこと」のパフォーマンステストに関しては、定期テストで毎回、英作文を出題している（年間では4回実施予定）。その内容は、教科書の題材に関係したものや、学校・学年行事に関係したものなど、その都度テーマを設定している。採点基準を、文をたくさん書くほど得点が高くなるように設定したので、回数を重ねるにつれて、生徒の書く分量が増えた。今後の課題は、書く内容の質を高めるよう、普段の授業から意識して指導することである。

[高等学校]

第1学年生徒を対象に7月と12月に GTEC を実施し学力調査を行っている。また第1学年生徒に対して6月と11月に英語学習への意欲と関心に関するアンケートを行った。6月と11月の結果を比較して生徒の意識が変化したこととして2点挙げられる。

1点目は読むことの技能に関する項目で、11月では苦手としている生徒の割合が若干増えたことである。これは高校生になって学習する英文の量が格段に増えたことと、その理解に必要な語数が増えたことが原因と思われる。

2点目は「読んだり聞いたりしたことについて簡単に英語で相手に伝えること」ができるようになったという生徒の割合が増えたことである。この項目は「英語で伝える」ことに関してスピーキングの能力がついたと思う生徒が増えたということの意味すると考えられる。これは授業でのリテリングの指導や、それにつながる年2回のスピーキングテストの取組がよい影響を及ぼしていると思われる。ただ、教員側が把握する生徒の到達度は、満足できるものではない。生徒が発する英文は、伝えるべき情報量が不十分であったり、内容そのものは伝わるものの文法的な正確さに著しく欠ける英文を話したりする生徒が多くいる。

これらのことを踏まえて研究目標の「発表、討論、交渉等の高度な言語活動」ができているかどうかを、当該校の CAN-DO リスト記載の1年生後期、スピーキング区分で評価してみると、「あるテーマについて自分が言おうとすることや文字で与えられた情報などについて

て（１）その内容を覚え、（２）語順ミスや欠落情報なく、（３）聞き手が理解できる音量とスピードで相手にその意味を伝えることができる。」のうち、（１）はおおむね達成できていると思われるが、（２）では情報の欠落がある生徒が多く、文法的なミスは多くは問わないものの語順ミスをする生徒も若干いるようである。

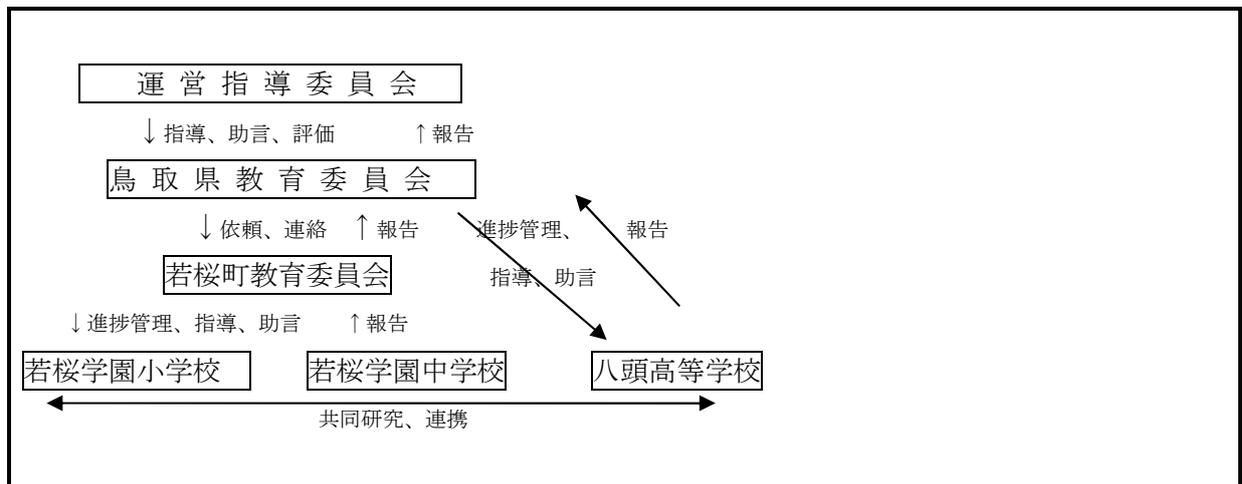
今後の課題として、（２）の文法的な正確さも意識させながらアウトプットにつなげることと、（３）の聞き手を意識しながら伝えること

を中心とした指導の実践を掲げたい。

以上のように、「教室内で生徒同士の英語のコミュニケーションを促進する」という意味ではその機会を授業内で多く取り入れており、授業改革は進行しているといえる。次の段階として生徒の発話の質（情報の適切さ、英文の正確さ）を向上させるための活動を考え、4技能統合型のコミュニケーション活動の研究を進めていきたい。さらに、本年度の研究成果を生かし、現行の CAN-DO リストの見直しを行う予定である。

4. 研究組織

（１）研究組織の概要



（２）運営指導委員会

①活動計画

○活動計画

第1回運営指導委員会

- ・本年度計画の検討

第2回運営指導委員会

- ・事業の進捗状況への指導・助言

第3回運営指導委員会

- ・本年度事業の評価

○平成27年度の進捗状況・課題

各学校の研究の進捗管理と推進のため、下記の内容について計画通り実施した。取組内容が校種間で共有され、今後の研究につながる指導助言が得られた反面、取組事項が多岐にわ

たるため、報告に時間を取られ、協議の時間を十分取ることができなかった。協議事項を精選し、研究の中心となる事柄について一層の連携が図れるようにしていきたい。

第1回運営指導委員会

- ・6月実施アンケート結果の考察
- ・小学校補助教材活用事例（概要、児童の達成状況）
- ・小学校評価の在り方（評価の観点、評価事例）
- ・CAN-DO リストを反映したパフォーマンステストや定期テスト問題

第2回運営指導委員会

- ・アンケート結果を生かした授業改善例
- ・小学校5・6年の評価活動例
- ・綴りと音の指導の成果と課題
- ・小中高 CAN-DO リストの系統性

第3回運営指導委員会（2月実施予定）

- ・本年度事業の評価

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	・事務局による事業説明等の打合せ会	
5月		
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・小中合同授業研究会（第1回） 公開…3年生外国語活動と中学2年生英語 小中一貫校（若桜学園）のため、全職員で研究協議 強化地域拠点内の連携高等学校からも参加 指導助言…筑波大学附属中学校 教諭 島根大学教育学部 准教授 ・若桜学園英語校内研修①…Classroom English 小学校教員の英語指導力向上を目的として実施 中学校英語教員も参加 ・英語学習への関心意欲に関するアンケート（第1回） 	
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・若桜学園英語校内研修②…フォニックス ・外部試験GTEC実施（第1回） 対象…中学3年生、高校1年生 	

8月	<ul style="list-style-type: none"> 第1回地域拠点内連絡協議会（单元ごとの CAN-DO リスト形式による学習到達目標の作成、小学校における音と綴りの関係の指導の検証等） 	第1回運営指導委員会
9月	<ul style="list-style-type: none"> 高等学校授業研究会（第1回） 公開…1年生 地域拠点内の中学校英語教員も参加 指導助言…大阪府立高津高等学校 教諭 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> 若桜学園英語校内研修③…絵本の読み聞かせ 	
11月	<ul style="list-style-type: none"> 小学校授業研究会（第2回） 公開…5年生英語 小中一貫校のため、全職員で研究協議 強化地域拠点内の連携高等学校からも参加 指導助言…島根大学教育学部 准教授 若桜学園英語校内研修④…英語で活動のセットアップ 英語学習への関心意欲に関するアンケート（第2回） 	
12月	<ul style="list-style-type: none"> 外部試験GTEC実施（第2回） 対象…中学3年生、高校1年生 高等学校授業研究会（第2回） 公開…1年生 地域拠点内の中学校英語教員も参加 指導助言…大阪府立高津高等学校 教諭 第2回地域拠点内連絡協議会（小学校評価方法の検証、アンケート調査結果まとめ） 	第2回運営指導委員会
1月	<ul style="list-style-type: none"> 中学校授業研究会（第2回） 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> 外部試験実施 英検 Jr. …小学校5・6年生 英検 IBA …中学校1・2年生 若桜学園英語校内研修⑤…次年度に向けての年間指導計画の見直し 先進校視察 徳島県鳴門市立林崎小学校 東京都三鷹市立第一中学校 広島県立賀茂高等学校 第3回地域拠点内連絡協議会（单元ごとの CAN-DO リスト形式による学習到達目標達成状況の検証） 	第3回運営指導委員会

3月		
【その他の取組】※あれば記入		